

[illegible]

た、時流を考えれば、写真の世界でも戦争に	対する社会的な主張が為されることに無理は	ないであろう。しかし、森山の『ハワイ』で	は、鳥居や日本人墓地の写真はあるが数は極	めて少なく、何かしらの問題提起は為されて	いない。あくまで、自分が経験したかつての	戦争への感情をほんのりと示すという具合の	扱い方である。基地に触れていないことをみ	ても、戦争にまつわる感情自体がそれほど強	いものではないと考えられる。	一方、観光地としてのハワイの姿は、賑わ	った様子よりも閑散とした空気を漂わせる写	真のほうに多い。店舗の壁はぼろぼろ	にペンキが剥がれ、まるで営業していないか	のように見える。ビーチや街角で膝を抱えて	疲労感を漂わせる人、時代遅れのマネキン達	といった被写体から、現在の活気ある観光地	ハワイの姿は想像されない。	森山はこれまで様々な場所に赴き、撮影を	行っている。日本中の劇場を巡り、国道をひ
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------	---------------------	----------------------	-------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------	---------------------	----------------------

た	走	り	、	遠	野	、	ブ	エ	ノ	ス	ア	イ	レ	ス	、	パ	リ	へ	飛
び	、	大	阪	や	新	宿	を	徘	徊	し	、	上	海	も	歩	き	回	っ	た
そ	し	て	、	そ	れ	ぞ	れ	の	場	所	で	大	量	の	写	真	を	撮	影
し	て	き	た	。	し	か	し	、	私	は	森	山	に	、	そ	の	よ	う	に
多	く	の	場	所	を	移	動	す	る	活	動	的	な	写	真	家	と	い	う
印	象	を	あ	ま	り	強	く	持	っ	て	い	る	わ	け	で	は	な	い	。
な	ぜ	な	ら	、	ど	の	場	所	で	あ	っ	て	も	、	森	山	の	写	真
に	大	き	な	変	化	を	感	じ	る	わ	け	で	は	な	い	か	ら	で	あ
る	。																		
	森	山	は	ど	こ	へ	赴	い	て	も	、	同	じ	よ	う	な	被	写	体
を	撮	影	し	て	い	る	。	ポ	ス	タ	ー	の	な	か	の	女	性	、	船
路	地	、	マ	ネ	キン	、	消	失	点	へ	と	繋	が	る	道	路	、	道	
端	で	か	が	み	込	む	人	や	抱	か	れ	た	赤	ん	坊	な	ど	に	森
山	は	反	応	し	て	い	る	。	そ	の	土	地	が	持	つ	特	徴	が	影
響	す	る	こ	と	は	あ	る	が	、	森	山	の	撮	り	方	が	変	化	し
て	い	る	と	は	感	じ	ら	れ	な	い	。	よ	く	見	ら	れ	る	右	上
が	り	の	構	図	や	、	一	部	を	暗	く	焼	き	込	ん	だ	空	も	、
場	所	に	よ	っ	て	変	化	さ	せ	て	い	る	わ	け	で	は	な	い	。
よ	っ	て	、	個	別	の	写	真	を	取	り	上	げ	る	と	、	ど	の	場
所	で	撮	影	さ	れ	た	も	の	か	は	っ	き	り	と	わ	か	ら	な	い

に撮った結果、同じような被写体が繰り返し	語られており、他の場所においても、無作為	も複写してやろうという姿勢であったことが	れる『遠野物語』においても、とにかく何で	る考え方が凝縮されている」（註1）といわ	ているとは考えにくい。「森山の写真に対す	過ぎないのではないか。そこに意図が介入し	に心惹かれているということを示しているに	はなく、単に森山がどこに行っても同じもの	が浮き彫りにされることを目指しているので	れることは、それぞれの場所の共通性や差異	ている。であるから、同じ被写体が繰り返さ	写真撮った、という姿勢で写真が提示され	は考えられない。あくまで、その場所を歩き	森山においてそのような写真の展示や写真集	を並べて見せる手法が考えられる。しかし、	ために、違う場所で撮影された同じモチーフ	にある共通性、あるいは逆に差異を強調する	被写体が意図的に繰り返される場合、そこ	ものが多いのである。
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	------------

取り上げられたということが推測される。	通常、単に心惹かれたものがどこに行っても同じであつたというようなことは、マンネリズムとして敬遠されるのではないだろうか	その場所ごとの特徴や本質、社会的な問題意識というようなものを意図的に探ろうとするのである、異なるアプローチが為されるべきではないだろうか。森山が写真において提示しようとしているものは何か、そのためにどのような意向で撮影地を選定し、撮影しているであろうか。	場所の選定について、『ハワイ』にはこのように森山の言葉が書かれている。	「なぜハワイなのか、なぜハワイを写したかつたのか、写し終わつた今にしてまだ分から	ない。きっと、ぼくの意識の下の流れのどこかに、いつしかハワイの島々へといざなわれ	る一本の記憶の糸が繋がつていたのではないか。	子供のところから心のうちにあつた、まだ見ぬハワイの想いに沿つていつたような気
---------------------	---	---	-------------------------------------	--	--	------------------------	--

もする。「(註2)
 この文章は、すぐさま先に挙げた『遠野物語』の文章を想起させる。森山は遠野という場所を選定した理由について、「遠野のことも、僕のそういった日常の無数のこだわりのなかから、どこか必然といった感じで徐々に出てきたものなんじゃないかと思います。」(註3、傍点は桐谷による)と述べている。
 一方では「僕のなかに抜きさししがたくある『ふるさと』のイメージに対する願望と憧憬」(註4)も理由のひとつとして挙げているが、その後「ふるさと」のイメージからはふっきれて撮影したとも書いてあるので、幼少時代への想いを追求するという姿勢ではないことがわかる。おそらくハワイにおいても同じスタンスであったことが推測され、幼少期への想いは一般的なセンチメンタリズムであるといえるだろう。とすれば、「日常の無数のこだわり」が森山を導いたというほうが、真実に近いと思われる。

場所の選定については、かつて『朝日ジャ	ーナル』のグラビアページのディレクション	をした長野重一が森山の逸話を語っている。	「森山さんが祇園の芸者が集まるのを撮りた	いとか、大阪の造幣局の桜の通りぬけを撮り	たいとか、問題意識、話題性が全くないわけ	ただ個人的に撮りたいというもの。」（註	5）	つまり、こだわりや個人的な嗜好で森山は	場所を選び、一度撮影地に立てば無作為に被	写体を写真に収めるということになる。そう	して撮影したものと、森山はどのように向き	合っているのか。『ハワイ』について、森山	はインタビューでこのように話している。	「撮っている時は『どいう風な本にした	い』とか『どんな本になるのか』というのは	つかみきれないまま、ずっと撮り続けている	プリントする段階になって初めて少し見えて	きて、さらに本に編集する段階で、やっぴ	とつの形として“ハワイ”の全体像が明らか
---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------

。

。

よ	う	ど	森	山	が	写	真	の	世	界	へ	と	足	を	踏	み	入	れ	た
イ	に	、	今	現	在	の	ハ	ワ	イ	を	感	じ	ず	、	む	し	ろ	、	ち
し	れ	な	い	。	こ	の	三	年	程	の	間	に	撮	影	さ	れ	た	ハ	ワ
ば	、	私	は	そ	こ	ま	で	違	和	感	を	感	じ	な	か	っ	た	か	も
写	真	群	が	ず	っ	と	以	前	に	撮	影	さ	れ	た	も	の	で	あ	れ
た	ハ	ワ	イ	は	、	私	に	違	和	感	を	感	じ	さ	せ	た	。	こ	の
立	ち	戻	り	た	い	。	森	山	の	個	人	的	嗜	好	で	撮	影	さ	れ
	こ	こ	で	、	私	が	『	ハ	ワ	イ	』	に	感	じ	た	違	和	感	に
て	い	る	の	で	あ	る	。												
結	果	と	し	て	自	分	を	知	る	、	そ	の	繰	り	返	し	を	行	っ
森	山	は	意	識	的	に	で	は	な	く	被	写	体	を	「	複	写	」	し
所	の	選	定	は	契	機	に	過	ぎ	な	い	。	ど	こ	へ	赴	い	て	も
体	像	を	感	じ	取	っ	て	い	る	と	い	う	こ	と	に	な	る	。	場
る	も	の	を	確	認	し	、	そ	こ	か	ら	自	分	の	写	真	群	の	全
て	は	自	分	の	こ	だ	わ	り	、	嗜	好	、	純	粋	に	心	惹	か	れ
と	め	る	こ	と	で	、	自	分	が	撮	影	し	た	ハ	ワ	イ	、	ひ	い
に	暗	室	で	も	う	一	度	出	会	い	、	そ	し	て	本	と	し	て	ま
	森	山	は	自	身	が	撮	影	し	た	写	真	に	プ	リ	ン	ト	の	際
(	註	6	)																
に	な	っ	て	き	た	か	な	、	っ	て	い	う	感	じ	だ	ね	。	「	

、

頃	から、	少なくとも	平成となる	以前の	もので	ある	ように	感じる	という	ことが、	違和感の	起	因	する	ところ	なので	ある	。	森山	は	単純に	心惹か	れた	もの	を	撮っ	て	い	る	わ	け	で	あ	る	か	ら、	作	品	に	過	去	を	写	し	込	も	う	と	い	う	意	思	が	あ	っ	た	と	は	考	え	に	く	い	。	過	去	を	演	出	す	る	こ	と	は	い	く	ら	で	も	可	能	で	あ	ろ	う	が、	森	山	の	撮	影	は	演	出	と	い	っ	た	行	為	と	は	無	縁	な	は	ず	で	あ	る	。	た	だ	単	に、	森	山	が	か	つ	て	写	真	を	志	し	た	頃	に	人	や	事	物、	風	景	が	漂	わ	せ	て	い	た	空	気	を	現	在	も	個	人	と	し	て	嗜	好	し	て	い	る	こ	と	の	結	果	と	し	て、	写	真	に	過	去	の	雰	囲	気	が	醸	し	出	さ	れ	て	い	る	と	い	う	こ	と	な	の	だ	。	つ	ま	り、	今	撮	っ	て	も、	三	十	年	前	に	撮	っ	て	い	た	と	し	て	も、	作	品	に	根	ざ	し	て	い	る	嗜	好	が	変	化	し	て	い	な	け	れ	ば、	基	本	的	に	同	じ	な	の	で	あ	る	。	よ	っ	て、	森	山	の	写	真	は、	時	流	に	沿	っ	た、	社	会	に	対	す	る	問	題	意	識	や	そ	れ	に	対	す	る	主	張	を	示	し	た	作	品	と	は	根	本	的	に	異	な	る	。	こ	こ	で	注	目	す	べ	き	点	は、	社	会	へ	の	問	題	意	識
---	-----	-------	-------	-----	-----	----	-----	-----	-----	------	------	---	---	----	-----	-----	----	---	----	---	-----	-----	----	----	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---

主張を持つということとは、意識の中に他者を
持つことであり、人と関わる社会に生きる個
人にとって自己形成の拠り所だということであ
る。つまり、自己の中に他者を意識するこ
とは、自己の立ち位置を他者に示す行為であ
ると同時に、他者からの反響で自己を確認す
る行為であるということである。ところが、
個人的な嗜好は、自分が歩んできた軌跡が自
然と形作るものであって、他者への意識とは
無関係であり、他者へのアピールを行わない
よって、個人的嗜好で生きる人間は、他者を
利用した自己確認のための手段を持たない。
いわば孤独に自己を追求していくだけである
この自己を追求するという行為はそのまま
森山にとって、移動、撮影、プリント、本
の制作や展示という一連の行為になるのであ
り、彼の作品は自己追求の記録である。森山
は他者ではなく、現実の力を借りて、自己の
追求をしているということになる。また、私
たちは、森山の作品を前に、森山大道という

。

。

純粹な自己と向き合っているということになるのだ。
 ここに、「純粹な自己」とは何かという問いが発生する。私たちは他者との関わりの中で生きる社会的動物であり、社会的という言葉の中には理性や他者に向けた自己演出が含まれる。では、「純粹な自己」が、人間としての思考を含まない、いわば本能的な感覚のみで形成されているかというところにも疑問を抱かざるを得ない。人間のなかには、理性や自己演出以外にも、現実に触発され展開する思考があるはずだ。
 芸術が自己の社会的なアピールであるならば、人間は社会に問題を提示し、主張としての創作活動を行えば良い。受け取る側もそれを読み解いて行けば良いのである。しかし、芸術とは既成の価値観に支配された世界を疑い、問いを発するものなのではないだろうか。もちろん、社会的な主張をする芸術を否定するわけではない。それはひとつの手段である

と
思
う
。
た
だ
、
今
あ
る
現
状
に
対
し
何
が
必
要
か
、
何
の
た
め
に
何
を
為
す
べ
き
か
と
い
う
問
い
に
は
、
時
流
の
流
れ
に
沿
っ
た
も
の
と
、
時
流
と
は
与
せ
ず
淡
々
と
継
続
し
て
い
く
も
の
と
が
、
同
時
に
必
要
な
の
で
は
な
い
だ
ろ
う
か
。
逆
説
的
で
は
あ
る
が
、
人
間
と
い
う
も
の
が
生
き
る
以
上
、
社
会
と
完
全
に
隔
絶
さ
れ
た
、
「
純
粋
な
自
己
」
は
存
在
し
な
い
で
あ
ろ
う
。
し
か
し
、
写
真
が
撮
影
行
為
に
カ
メ
ラ
Ⅱ
意
志
を
持
た
ぬ
機
械
が
介
入
す
る
記
録
で
あ
る
こ
と
に
よ
り
、
表
現
と
し
て
の
「
純
粋
な
自
己
」
が
現
出
す
る
可
能
性
は
あ
る
。
人
間
が
移
ろ
う
存
在
で
あ
れ
ば
、
記
録
自
体
も
思
考
の
揺
れ
動
き
を
反
映
す
る
も
の
で
あ
ろ
う
。
現
在
確
か
に
あ
る
も
の
を
単
に
複
写
し
た
だ
け
の
写
真
群
が
、
時
間
の
蓄
積
と
そ
の
時
間
に
生
きた
人
間
を
表
現
し
て
い
る
。
私
は
森
山
の
写
真
を
前
に
、
こ
こ
に
は
何
も
な
い
と
思
う
瞬
間
が
あ
る
。
そ
し
て
、
そ
の
一
瞬
後
に
、
こ
こ
に
は
全
て
が
あ
る
と
感
じ
る
。
そ
れ
は
一
人
の
人
間
が
生
活
す
る
こ
と
が
全
く
の
無
意
味
で
あ
る
と
同
時
に
、
そ
れ
が
全
て
で
あ
る
と
い
う
こ
と
に
同
義

[illegible]

